

ヨーロッパひとり旅。
あなたは、このピンチを
どう切り抜ける？

Part 1

ヒグチ サトシ



脱ツアー旅行！
個人旅行はスリス満点！

第一弾：「フラン」の悪夢 ～ シャモニから
ジュネーブ行きのバスでの出来事

ヨーロッパ旅行中に突然遭遇したピンチと、
それを、どのように切り抜けたのかの実話

ヒグピー書房 定価 無料



「フラン」の悪夢 ～ シャモニからジュネーブ行きのバスでの出来事

1980年代の後半の頃なので、もう20年以上前の話になるが、このバスでの出来事は未だに良く覚えている。

当時、イギリスに出張する機会があった私は、出張中にイースター・ホリデーという4連休があることを知り、出張先からシャモニにスキーに行こうと計画を立てた。

シャモニは第一回冬季オリンピックが開かれた、モンブランの麓にあるフランス屈指の山岳リゾートであり、冬はウインター・スポーツ、夏はトレッキングでにぎわう。

出張中とはいえ、遊びでスキーに行こうというのだから、自腹を切るのは当然なのだが、成田・英国ヒースロー間往復の航空券を買くと、目的地からさらに別の都市までの往復フライトが無料になる事を旅行代理店の担当者から知り、会社には内緒でシャモニへ行くためのフライトも予約してもらった。宿の予約は、インターネットがまだ無い時代なので、ホテル・チェーンであるベスト・ウエスタンの日本オフィスに電話して確保した。

イースター・ホリデー初日の朝、宿泊先のホテルからヒースロー空港へは滞在中の足として借りていたレンタカーで行き、そこから空路、ジュネーブに向かった。ジュネーブはレマン湖で有名な風光明媚なスイスの観光地であり、同時に色々な国際機関が拠点を置く国際都市だ。目的地のシャモニはフランスだが、一番近い空港はスイスのジュネーブ空港で、ジュネーブからシャモニへはバスが2時間で結んでいる。ヨーロッパでは、目的地に一番近い空港が、別の国の空港であることは珍しくない。この辺が、ヨーロッパを旅する際の面白い所だ。

ジュネーブ空港に到着した私は、すぐさまバスの時間を確認するためにバス・カウンターに向かった。事前にバスの運行スケジュールを入手することが出来れば安心だったのだが、インターネットが無い時代、日本にいてヨーロッパのバスの時刻表を知る事は簡単ではなかった。その上、バスの本数はあまり多くないと思われた。従って運が悪いと、バスの出発まで何時間も待たなくてはならなかったが、幸い30分後にバスがあることが分かったので、早速チケットを買う事にした。チケットは40フランとのことで、支払はカードで済ませた。実はここに、後のトラブルの元があったのだが、その時は知る由もなかった。

シャモニに到着すると、明日朝からすぐに滑れる様に、さっそくスキー板を借りにスポーツ店に行った。スキー・ブーツは自分のを持って来たが、本来は出張なので、さすがに板までは持って行かなかったのだ。往復に2日かかるが、イースター・ホリデーは4連休なので、丸2日間はスキーを楽しむことができる。

ヨーロッパのスキー場は日本と異なり、森林限界を超えた所にゲレンデがあるのが特徴だ。標高が高い分、空気が薄いので日本でスキーをしている時より息が上がるのが早い。

季節はもう春なので昼間の日差しは強くなっていた。そのため日中に解けた雪は夜間に凍り、スキー場全体がアイスバーンになっていた。もはやスキー場というよりスケート場と言ったほうが相応しいくらいだった。

最終日は、せっくなのでジュネーブも観光したいと思い、朝6時発の、この日一番のバスでシャモニを立つ事にした。帰りのフライトはジュネーブ空港を午後4時頃出発なので、5～6時間はジュネーブを見る事ができるはずだった。バスにさえ乗ってしまえば、あとはスイスなので、前夜はバス代の40フランだけを残し、残りの現金は使い切った。

早朝、カードでホテルの支払いを済ませると、まだ寝静まっている日の出前のシャモニの街を、スキー・ブーツが入った重いスーツ・ケースを引きずりながら、バスが出発する駅へと向かった。

駅に着いたのはバスの出発時刻の15分前だった。まだ始発電車には時間があるのか、駅のシャッターは閉まったままだった。バスのチケット売り場も閉まっていた。そして人気もなかった。ただ街灯だけが、闇の中にある駅前を照らしながら、日が昇るのを静かに待っていた。

「本当にバスは来るのだろうか？」

私は漠然とした不安を感じた。バスの時間が近いというのにチケット売り場が開く気配が無いからだ。

しかし少しすると徐々に人も集まり始め、出発時刻ぎりぎりにバスは現れた。

運転手に、どこでチケットを買えば良いのか聞くと、「後でバスの中で徴収するから、まずは乗って」と言われた。

私は真っ先に、景色がよく見える最前列に陣取った。すぐ後から10人ほどがバスに乗り込んできたが、それが終わるとバスはすぐに出発した。バスは暗いシャモニの街中をゆっくりと通過すると、一路ジュネーブへと山間の道をスピードを上げて走り始めた。

20分程走っただろうか？バスは小さな峠に立つ1件のカフェの前で停車した。「こんな所にもバス停があるのか？」と訝しく思っていると、運転席から通路に出て来た運転手は、

「みんな朝早かっただろう？ 朝食を食べてないなら、ここでコーヒーを飲んでいけるよ」

と言った後、

「その前に、料金を徴収するから用意して！」

と言った。どうやらバス停ではないらしい。

私は、このために大事に残しておいた最後の現金である40フランを運転手に見せた。すると運転手は「フランス・フランなら160フラン」だという。

「まずい！」

私は運転手の言葉によって大きな誤解をしている事を瞬時に悟ったのであった。

初日、ジュネーブ空港で支払ったバス代の40フランは、40スイス・フランだったのだ。

それもそのはず。スイスでチケットを購入したのだから。しかレジット・カードで支払ったので、スイス・フランで支払った事を全く意識していなかった。

その時、私が頭にインプットしたのは40という数字だけであった。しかし、いま私が持っているフランス・フランの価値は、スイス・フランの4分の1なのだ。だからスイス・フランで40フランの運賃は、フランス・フランだと4倍の160フラン必要なのだ。

でも、昨夜40フランス・フランを残して、すべて使い尽くしてしまった。

「金が無いのですが」

と言うと、運転手は「なら、バスを降りろ」という。

私は驚いた。そんな無茶な。こんな山間の、どことも分からない場所で降ろされたらどうすればいいんだ？ 重たい荷物もあるのに。これでは、帰りのフライトに間に合わなくなる！

「また後で来るから」

運転手はそう言うのと、バス代徴収の為に後方の席に向かった。しばし猶予を貰った私は、この間に何か解決策を見つけ出さなくてはならない。

私は、通路を挟んで横の椅子に座っている40代ぐらいの夫婦に「お金を貸してくれないか？」と頼んでみた。夫婦も私と運転手の会話から状況は察している様だったが、突然振られた夫婦も、どうしたものかと互いに顔を見合わせている。

そりゃーそうだろう。見知らぬアジア人から、いきなり金を貸してくれと言われても、この状況では「金をくれ」と言われているのと同じだ。彼らからすると、それほど高額でもないバス代すら持っていない、ということが理解できないらしい。当然だ。

1、2分ほどして、料金徴収の為にバスの後方に行っていた運転手が最前列に座っている私の所に戻ってきた。私が困っていると、急に運転手が私の財布を取り上げ、中をのぞいて言った。

「トラベラーズ・チェックがあるじゃないか。終点到両替所があるので、そこで換金しろ」

まさしく神の救いの言葉であった。「降りろ」と言われた時は、どんでもない運転手だと思ったが、あながち悪い人でもないようだ。

私はトラベラーズ・チェックによって救われたのであった。

私は運転手と例のご夫婦とともに、カフェでコーヒーを飲んだ後、無事、目的地のジュネーブに行く事ができたのであった。終点のバス・ターミナルに両替所があったのは、不幸中の幸い以外の何物でもない。

現在、ヨーロッパではユーロが統一通貨になっているので、出国する際にその国の現金を消化する、といった事は少なくなったが、それでもスイスやイギリスでは今でも独自の通貨を使用している。現金を消化しすぎると思わぬ事態に遭遇するという事を学んだ出来事であった。

今回、この経験を文章にするに当たって当時の写真を探した。その際にカフェのカードも見つかったので、駄目元でグーグルのストリート・ビューでカフェの所在を確認した所、なんとカフェを見つける事が出来た。20数年前に「降りろ」とバスの運転手に言われた場所がどこだったのか、ずっと知りたいと思っていたのだが、今回確認する事ができて感慨深い。

当時はこの「事件」でかなり動揺していたのと、早朝で暗かったせいも、このカフェが峠の一軒家であったように記憶していたのだが、ストリート・ビューで確認すると、シャモニから西に7Km程行ったレ・ズッシュ（Les Houches）という小さな街にあることが分かった。また、このカフェの前にバス停があることも確認できた。



カフェでのスナップ写真（右手前が私の横に座っていた夫婦、その奥が運転手。左はカフェの店主）、バスのチケット（左上）とカフェのカード（右）



ストリート・ビューで検索したカフェ Le Christiania（正面真ん中）



スリート・ビューで検索したカフェ Le Christianiaからシャモニ方面を見る



スリート・ビューで検索したカフェ Le Christiania（右側）